英詩に見る子供の姿（一）

松原至大

私どもの生活のすべてにわたつて、英米の人たちよりも劣つたものの多いのは、ただ國民性の相違であるとばかりに、片づけ得ることではないと思う。國民各自の勉强の度合が、大きなハンディキャップをなしている。特に藝術の各分野において、著しくそれが目立つ。

私は今よい機會を與えられたので、英米の詩に見られる子供の姿を、こと數回にわたつてとらえて見たいと思う。作者の年代を追つて行くのも、一つのやり方ではあるが、私は自分の印象を追つて行くことにした。なぜならば、その方が私が受けた感銘に近いものを、皆さんにお傳えし得ると思うからである。

子供をうたつた英詩と云えば、今日でもまず多くの人の心に浮ぶのは、イギリスの詩人ロバート・ルイズ・スティーヴンスン（千八百五十年—千八百九十四年）であろう。スティーヴンスンはスコットランドの首都、エディンバラの燈臺技師の子として生れた。六歳の時にヘブライの聖人モーゼに關する隨筆をかいて、お母さんに献じたのが、彼の文學作品の最初であると云われる。その時お母さんは御褒美に、バイブルの繪本を與えたと傳えられる。多くの史家は、これが彼を文學者にした大きな動機であつたと見ているのである。

スティーヴンスンが子供をうたつた詩の特異性とでも云うべきものは、子供の純眞性が少しの曇りもなく、そのままに表現されていると云うことである。云うところの童心が、彼の場合は作そのものに美しくあふれているように思える。このようなことは、なかなかに少いことで、多くの詩人の場合は、どうしても子供の心を外部から眺めがちになるものである。

いかに子供の世界を通つてきたとは云え、作者自らの子供の世界は、遠い彼方の日のことゆえ、どんなに自分は子供の國に今なお住んでいると自負しても、それは無理なことである。それをスティーヴンスンの場合は、何等の自負するところもなく、昔のままに子供の心を、しつかりと握つているのである。握ると云うよりも、身につけていると

云う方が正しいかもしれない。
この意味における彼の代表作品集は、「子供の詩の園」（チャイルドス・ガーデン・オブ・ヴァーズ）であろう。その中に「樂しい思い」（ハッピー・ソウト）と云う詩がある。

この世の中には、
いろんなものが
いつぱい。
僕たちみんな
きつと幸福、
王さまのように。

私が解説を加えるまでもなく、これこそこの世の中に生をうけた世界中の子供たちが、同じように持つ心の歩み初めではなかろうか。子供ばかりではない。その父、その母が、わが子の呼吸の最初において、同じように乞い願い、またその實現を、心の中にかたく誓おうとする思いではなかろうか。私はこの時をまず第一に記して、この稿をすすめたいと思う。

のぞみ
僕が大人になつたら
それこそえらくて
立派になりたい。
そしてほかの女の子
男の子に云いたいことは、
僕のおもちやを
いじくらないこと。

おそらくこの詩を讀んで、ほほえまない人の親はないであろう。これらの作品をおさめた「子供の時の園」が、はじめて世に出たのは千八百八十五年で、彼の三十五歳の時である。この時はあるいはもつと若い日の作であるかもしれないが、それにしても多くの人たちが忘却の彼方に追いやりやすいこのような子供の日の思いを、平明なリズムの中に、力強くまた美しく、子供の日のことそのままにとらえているのは、彼の天分と努力とのすぐれていることによるものと思われる。

眼に見えないお友だち
子供がひとりで、
芝生の上で遊んでいる時、
眼に見えない
お友だちがよつてくる。
子供がひとりで
樂しくおとなしいと、
「子供のお友だち」は

森の中から現れる。
だれもその足音を聞かない、
その姿を見ない。
それはあなた方にも
描けない一枚の繪。
でも、もつと出てくる、
お家の外でも、内でも、
子供がひとりで
樂しく遊んでいる時は。

そのお友だちは
月桂樹の中に寢ている。
草の上を走る。
あなた方が
ガラスの樂器をならすと、
歌もうたう。
あなた方が樂しくて樂しくつて
なぜだかわからない時、
いつでもきつと
その「子供のお友だち」は
そばにいるのだ。

そのお友だちは
小さいのが大好き、
大きくなるのは大嫌い。
あなた方が掘つた穴の中にも
住んでいるのがそのお友だち。

あなた方が
ブリキの兵隊さんと遊ぶ時、
フランス人に味方して
勝つことのないのが
そのお友だち。

夜になつて
あなた方がお床にはいると、
あなた方を寢せつけて、
じやまをしないのが
そのお友だち。
戸棚の中でも棚の上でも
どこにいたつて。

靜かな心で味わえば、これも解說を要しない作である。かえつて解說を加えることは、個々の人の心にふれるこの詩の持ち味を損うかもしれないと思うのである。私どもの心の中に、同じようにほのぼのとした暖かさをよみがえらせてくれるであろう。スティーヴンスンの詩に見る子供の姿は、私どもの百人が百人みな同じように、必ず持つている子供の世界である。